

## 二つの命

北斗市 福澤 きよ子

事故の朝、近所の人々の大声で知らされました。娘二人と友だち二人、ランドセルを背負った後ろ姿を見送った数分後のことです。

数十メートルの距離なのに、走っても走っても着きません。やっと通りに出た時、目に入ってきたのは歩道に倒れている双子の妹、佳奈。姉の亜紀はどこに、と思った時、路肩の草を枕のようにして、うっすらと目を開けて佳奈を見ているような姉の姿が目に入ってきました。その時、心の中で思ったことは「やっぱりお姉ちゃんだね。えらいね」

その先には、二人の友だちが倒れていました。声をかけると二人とも返事をしてくれました。

現場は地獄でした。ランドセルは肩ひもがちぎれ、靴は飛ばされ、他にも……。二人の娘の所に戻って声を掛けたくも、返事のないことは良くわかっていました。

現場にサイレンを鳴らした救急車が来て、目の前で止まり、隊員が降りて、「二名即死」と、現場から二人の子どもを乗せて走り去りました。その後もう1台、目の前で止まった車は、子どもたち同士でよく遊んだ家のお父さんでした。私に一言、「(病院に)任せて、安心して家に帰っていなさい」と。

病院では、主人の会社の社長が待っていてくれました。奥へ奥へと進んだその時、部屋のドアが10センチくらい開いていて、ベッドに横になっている子どもが姉の亜紀だとわかりました。直ぐ中から「今、きれいにしてお母さんの元へお返ししますから。もう少し待っていて下さい」と声をかけられました。それから、「二人のお子さんをどのようにして自宅へお連れしますか」と聞かれました。私は「二人とも抱いて帰りたい」とお願いしましたが、「とても抱いてお連れできる状態ではありません」との返答で、病院にお任せをすることにしました。そして「お子様二人をお母さんに」と案内された車には、二人とも一緒に寝かされており、親子3人で家へ帰ることができました。

事件当日、関わって下さった方々に感謝の気持ちを一言でしか言えませんでした。本当にありがとうございました。

子どもたちは10数年の人生で終わらされましたが、加害者は、1年8か月の刑期で家庭に戻り、普通の生活を送っています。何も無かった様に、二人の娘と両親、5人の生活を今もこれからも続けていると思うと、悔しくてたまりません。この悔しさを忘れるとしたら、私の一生が終わるときです。

今はただ、笑顔で話している顔を、「あのね、あのね」から始まる二人の言葉を、いっぱい思い出を残してくれたことを、私たちが親にしてくれたことを思います。二人の思い出が万華鏡のように浮かんでくるので、私たちは生きていくことができます。

これからも、二人の子どもたちがしっかりと夢を持って生きていけるようにと、被害者の会にも参加させてもらい、また、一人、迷惑かも知れませんが、娘と思える娘(こ)を……。

私たち夫婦は、子どもたちの分まで、思い出と一緒に、と思っています。もし子どもたちのことを忘れるとしたら、夫婦で娘の元に旅立つ時かと思っています。